

民族国家と多国籍文化

講演者：Tessa Morris Suzuki(Professor of Japanese Studies, Australian University)

日 時：October 20, 1994 (10:30-12:00)

場 所：H-252

テッサ・モーリス・スズキ教授は、イギリス国籍をもつオーストラリア在住の著名な新進気鋭の日本思想家であり、現在、オーストラリア・ナショナル・ユニヴァーシティー（キャンベラ）で教えておられる。教授は、学問およびジャーナリズムの世界においてふたたび関心が高まりつつある文明論の問題を取り上げている。スズキ教授は、論争を巻き起こした、サミュエル・P・ハンティントンの近年の論文「文明の衝突」（1992年）をとりあげ、ポスト冷戦の世界を特徴づけるものとして提起された八大文明の衝突であるとの彼のテーゼを批判的に吟味した。

このようなハンティントン・テーゼに対してスズキ教授は、経済の国際化、国民間の国際移動の激化、消費文明の地球化といった現代世界の種々の現象や趨勢を吟味しながら、むしろ問題は「文明概念」の終焉ではないか、と反論する。つまり、世界の諸文明がそれぞれの独自性や歴史的個性を保持できなくなる状況であり、画一的な消費文明の地球的な拡がりの危機の前にそれぞれの独自性やアイデンティティーが喪失される状況である。

こうしてスズキ教授は、現代世界の対立の構図が「文明の衝突」ではなく、「ファンダメンタリズム（原理主義）」と「プルーラリズム（多元主義）」との対立ではないか、と主張する。この対立の構図は、イスラム文明圏諸国、アメリカ合衆国、オーストラリアを含むすべての文明社会のなかでそれぞれの仕方で深刻化している。

スズキ教授の理解によれば、現代世界の課題は、こうした複雑で予測が付きにくい状況のなかで言葉の真なる意味での「多文化主義」を、社会と個人

の内面生活の両方のレベルで具現化することである。教授の講演は、御専門の日本の思想および文明状況に立ち入った議論があまり見られなかったのが残念であったが、そこには明確な論旨の展開があり、啓発的な示唆が多くみられた。

(講演は日本語で行われました。)

(文責：社会科学科準教授 千葉 眞)